



ンボモ村便り



コンゴ共和国オザラ・ココア国立公園のンボモ村より

第4回

～ 2つのプロジェクトの2年次の活動開始～

萩原幹子（JWCS プロジェクトスタッフ）

1. マルミミゾウの畑荒らし防御柵

（公益信託地球環境日本基金助成）

昨年度はンボモ村を中心に8村22か所の畑に、合計約11km長の廃油と唐辛子を使った柵を設置しました。ゾウは変わらず村周辺に生息しており、今年度も引き続き要望に応えられる限り、この防御柵を設置していきます。村周辺25kmを囲む、国立公園の事業として計画された電気柵設置が頓挫しており、ンボモ村の中もまだゾウの防御が必要です。また3月から始めた、現地住民の食料から出るブッシュミートの皮の腐敗臭によってゾウを遠ざける方法は効果のある場所もありますが、人間が盗むのか動物か、紛失するケースがあり、引き続き実験していきます。



畑に覆りまみりする小屋の脇を畑主の不在中にゾウが歩きまくり足跡を残した

2. 若者による野生動物と共存する村づくり

（プロ・ナトゥーラ・ファンド第8期協力型助成）

今年度は村の養蜂家に講師をお願いし、養蜂家養成塾を開催します。ミツバチは村、畑や森によくいるので野生のハチの巣から蜂蜜を採取することもあるのですが、そのために木を切り倒したり、適切な採取のタイミングでなかったりするので、持続的な方法ではなく、養蜂が注目されているのです。5月に4日間ミツバチの生態や養蜂技術についての講習を行ったあと、まずはミツバチの分蜂群を取り込むための巣箱を村のあちこちに設置し、すでに4箱に入り始めています。村には養蜂をやりたい人は多く、現在20名の幅広い年齢の男女が学んでいます。観光客にお土産として売ることのできる蜂蜜生産を身に付けることをまずは目指します。

農業実習畑では大きくなったサツマイモを5月に収穫しました。3月末に植えたケレ地方のピーナツは3か月後の7月に収穫期となり、村人たちの間でも噂となっています。



これまでの活動はウェブサイトに掲載しています。



養蜂の巣箱にハチを引き寄せる巣礎を取り付け中



ピーナツの収穫作業